

〔「新春を迎えて」展によせて〕

## 吉野の桜を描いた屏風

昨年当館で開催された特別展「聖域の美」には、「吉野花見図屏風」（細見美術館蔵）が出陳されました。同作品は、文禄3年（1594）2月末から3月初めに豊臣秀吉が主催した、吉野の花見をテーマとした六曲一雙の屏風です。秀吉一行は左隻に描かれ、金峯山寺蔵王堂に向かう様子とともに、それを見物する様々な人々が生き生きと描写されています（図1）。花見にはおよそ5千人が従い、5日間にわたって開催された盛大なものでした。屏風を観る者は、在りし日の花見を追体験し、秀吉の栄華を偲んだことでしょう。奇しくも展覧会の会期後半、総理大臣主催の「桜を見る会」が連日のように報道されました。会場である新宿御苑には約65種1100本程の桜が植えられており、昨年の会にはおよそ1万8千人が参加したといわれます。時代を超えた、権力者と花見の関わりについて考えさせられるものでした。

「一目千本」といわれる吉野の桜は、現代においても多くの人々を魅了しています。和歌の世界では、平安時代初期に編纂された最初の勅撰集である『古今和歌集』仮名序に、吉野の桜が雲に見立てられる記述があり、鎌倉時

代の『新古今和歌集』において吉野と桜の結びつきが確固たるものとなるのが先学によって明らかにされています。一方、吉野は修験道の聖地にあり、蔵王権現が祀られた金峯山は、修験者の一大拠点となりました。藤原道長に代表される貴族や天皇も度々参詣しています。また、672年の「壬申の乱」では、のちに天武天皇となる大海人皇子が吉野宮で挙兵し、源義経は兄頼朝と対立した際、吉野に逃れ、さらに、後醍醐天皇は南朝の拠点とするなど、古来より政治や宗教、文化とゆかりの深い、各時代の権力者たちにとって特別な場所であったことが窺えます。

興味深いことに、室町時代の終わりから江戸時代にかけて、吉野の桜をテーマとした屏風が数多く制作されました。特別出陳作品である「吉野図屏風」（春日大社蔵）がその一つです（図2・右隻）。小川が流れる画面には、岩や滝とともに満開に咲き誇る桜が描かれ、画中に散りばめられた花びらや、ゆったりとした金雲と相俟って、非常に美しい作品です。しかし、画面を見ただけでは、吉野の桜を描いていることは分かりません。吉野とされたのは、醍醐寺

の僧侶・義演（1558～1626）が記した『義演准后日記』にある、元和6年（1620）、御所にあった「桜花白数本盛の躰也、滝、谷川、岩」が描かれた「吉野金屏風」を拝借して写し、新たな屏風を作ったという記事に因みます。ほぼ同じ図様を持つ先行する作品が、サントリー美術館やアメリカ・ウェバーコレクションに現存しています（こちらは六曲一雙の屏風・16世紀の制作）。さらに、春日大社にはかつて、「桜の屏風三双」が所蔵されていたことが明らかにされています。これらの屏風が現存する「吉野図屏風」と類似した図様を持っていたとするならば、当時、春日大社の周辺では、由緒ある屏風として図様が尊重され、継承されたことが理解されます（泉万里『中世屏風絵研究』中央公論美術出版、2013年）。

「吉野図屏風」が「吉野」であることを読み解く手がかりとして、和歌が重要な鍵となることが指摘されています。すなわち、説明的ではない点に「吉野図屏風」の特色があります。「吉野」を連想させる最小限のモチーフで画面を構成し、画面を通して観る者が心の中で静かに満開の吉野山を逍遙する、そのような見方を

想像させます。鎌倉時代に貴族たちの間で流行した「春日宮曼荼羅」における、浄土の空間としての春日大社境内を描く静謐な画面を想起させます。「春日宮曼荼羅」も図様の規範性が強く、繰り返し描かれました。世俗的な要素を排した「吉野図屏風」にも宗教的な意味合いを読み取りたくなります。冒頭に紹介しました「吉野花見図屏風」には、秀吉によって再建、修理された金峯山寺蔵王堂が大きく描かれ（図3）、「吉野金屏風」を写させた義演は、秀吉や天皇・貴族の帰依を受けた当時の重要な僧侶です。吉野の桜を描いた屏風には、権力者たちの様々な想いやまなざしが交錯しているようです。（古川攝一）

※図1・3は、特別展『聖域の美—中世寺社境内図の風景—』大和文華館、2019年から複製致しました。



図1



図2



図3

季刊 美のたより No.209

令和2年1月5日

発行 大和文華館